

第2回 高等学校教育改革推進協議会 会議要旨

- | | |
|--------|--------------------------|
| 1 実施日時 | 平成23年11月22日（火） 午後2時～午後4時 |
| 2 実施場所 | 千葉市美術館講堂 |

1 報告

(1) 県立学校改革推進プランについて

- ・11月に公表した「県立学校改革推進プラン（最終案）」及び「第1次実施プログラム（案）」について説明するとともに、策定懇談会委員から「地域連携アクティブスクール」に期待する内容の意見が多数あった旨を報告。



(2) 県外視察について

- ・神奈川県立田奈高等学校，茨城県立茨城東高等学校の視察の概要について説明。

2 協議

(1) 地域連携の進め方について

《協議内容》

学校と地域が互いに必要性を感じ、プラスとなる連携を進め、さらに継続していくにはどうしたらよいか、どのような組織が必要かという視点で協議を行った。

ア) 泉高校

- ・企業，小中学校，営農家，自治会，他の県立高校など幅広く連携し，地域で面倒をみていただきたいと考えている。
- ・学校を退職した元校長など地域の有識者との連携も模索している他，新たな人材の活用について行政機関とも相談していく。



(キャリア教育支援コーディネーター)

- ・千葉市内を中心に20社ほどの企業で，就業体験の受け入れ体制ができており，今後は，保育園，図書館等とも協議を進める。

イ) 天羽高校

- ・商工会，ロータリークラブ等とも連携を進めている他，地域行事へも新たに参加している。
- ・いちどきに連携を拡大するのは難しいが，キャリア教育支援コーディネーターの力を借りながら地道に関係を構築している。

- ・まちづくりとひとづくりをテーマに開催するフォーラムをとおして、地域の力をいただくだけでなく、地域にもメリットのある関係を築いていく組織づくりに取り組む。

(キャリア教育支援コーディネーター)

- ・就業体験は次年度以降、より一層内容の充実を図る。
- ・郡部では、地域との連携は比較的容易であるが、地元での雇用が厳しいため、内定率を上げるには更なる取組が必要である。

ウ) 浦安南高校

- ・震災で一時学校を移転していたこともあり、新しい取組には着手していない。
- ・新しい住民の人が多く、地域としてまだ、成熟していないので、例えば、スポーツイベント等を開催した連携も考えたい。

エ) 流山北高校

- ・職業体験を充実させるとともに、地域の行事に積極的に参加している。
- ・ミニ集会に生徒の代表が参加し、地域の生の声を聞くようにしている。
- ・地域との連携に組織的に取り組むとともに、防災・防犯に役立つ連携を模索していく。

オ) 勝浦若潮高校

- ・小学校と連携した絵本の読み聞かせや、観光に関する職場を訪問した体験学習を新たに取り入れながら、コミュニケーション能力の育成を図っている。
- ・キャリアコンサルティング技能検定の講習受講を事業化したらよいのではないか。

《主な意見等》

- ・小中学校は地域に学校があり連携に取り組みやすいが、高校は地元以外からも生徒が通学してくる中、様々な取組を進めていることに敬意を表す。地域行事は子どもを抜きにしては成り立たない面があり、組織で対応しようとしても土日の行事の場合は管理職が対応することが多い。子どもは学校で学ぶのと同様に地域でいろいろなことを学んでくるので、地域の方に鍛えていただくことは他に代え難いが、連携を広げれば広げるほど、負担も増えていくことが懸念される。
 - 地域との連携は多くの付加価値を伴い、良い関係を作るまたとない機会であるため、若い教員を研修の意味も込めて参加させている。その体験は参加した教員の宝となり、次世代の人材育成にもつながる。
 - 地域との関係は切っても切れないものがあり、年配の教員が退職を迎えていくなか、若い教員にとって貴重な体験の機会である。部活動を介した交流などは長期休業をうまく活用している。
- ・高校で新規に採用される教員が増えており、研修を地域連携アクティブスクールで実施してもらいたい。
- ・保育園や幼稚園、福祉施設と連携している例があったが、千葉市には2つ、富津市に

は1つの児童養護施設があり、いずれも施設長を外部から招いて広かれた活動をしているので、連携を検討しても良いのではないかと。

→ 児童養護施設のイベントに吹奏楽部や合唱部が参加し、演奏している例はある。

- ・今年度の学校人権教育研究協議会では、児童養護施設から通学している生徒が在籍している学校同士でグループをつくり分科会を行うなどの研修が始まっており、こうした取組とも連携が可能である。

(2) 教育課程について

《協議内容》

その1

準備校で検討している「産業社会と人間」の導入に向け、課題をどのように解決していくか、また、研究校を含めキャリア教育をどのように充実させていくか、ジョブカフェちばのキャリアカウンセラーによるプレゼンテーションを踏まえて、協議を行った。

ア) 泉高校

- ・素案の段階だが、入り口となる1年生で1単位、出口となる3年生で1単位を分割履修させたいと考えている。

イ) 天羽高校

- ・3年間で生徒に身に付けさせたい力の1つは基礎的な学力であり、自尊感情を育てるため、「できた」「わかった」「ほめられた」という体験を重ねていくしかけが必要である。
- ・「産業社会と人間」のねらいや指導内容は、地域連携アクティブスクールの理念との親和性が高く、取り組みたいが、多忙感につながる懸念があり、不安を払拭していく必要がある。
- ・「産業社会と人間」を「道徳」を学ぶ時間として扱うことが認められないことが、障害となっている。

ウ) 浦安南高校

- ・インターンシップ受け入れ企業の充実を図る。
- ・勤労観を育成し進路意識を確立するため、3年生の4月に進路講演会を実施する。

エ) 流山北高校

- ・2年次の職場体験に向け、体系的な取組を行っている。
- ・各教科として体験活動を取り入れることを検討している。

オ) 勝浦若潮高校

- ・「産業社会と人間」を増単位して3単位で実施するとともに、PDCAサイクルを回しながら改善を行う。

カ) ジョブカフェちばによるプログラムの提案

- ・自己理解や職業理解をはじめとして、出口指導に付随するキャリア教育のプログラムが有効であると考ええる。
- ・意欲やイメージを高めた状態でスタートし、モチベーションを高く取り組めるものとして逆編年式プログラムがある他、ニーズに応じた様々なプログラムが可能である。
- ・認定を受けたキャリア教育コーディネーターや、企業、NPOをはじめとして、学校外に活用できるさまざまな組織がある。
- ・プログラム実施に当たっては、動機付けと実施するタイミングが重要である。
- ・地域連携アクティブスクールがキャリア教育を変えていってほしい。



《主な意見等》

- ・大学のキャリア教育のプログラムは、ほとんどが外部委託である。キャリア教育の内容だけでなく、担い手も考える必要があるが、見通しはどうか。
 - 外部委託の予算等は今後検討していく。
- ・予算や、担当する人材を含めて議論する必要がある。NPO法人企業教育研究会や、パナソニックが提供するプログラムなどは、内容のみならず予算を抑える面でも有効である。
- ・企業関係者等を招聘し、社会人としての心構えを説くような講演会を開催することは可能か。
 - 可能である。
- ・部活動に加入している生徒でも、キャリア教育の中で最も大事なコミュニケーション能力が不足していることを痛感する。
- ・座学形式の講義を増やすのではなく、継続的な体験プログラムを是非取り入れてほしい。
- ・若者同士が話をするカタリバは、会話能力の向上よりも会話のきっかけづくりに適している。また、ソーシャルスキルトレーニングを継続するには、予算面が課題となる。予算をかけないためには、目的が合致する大学や研究機関と連携するのがよい。
- ・単発プログラムには、単発なりの良さもある。
- ・予算をかけずにプログラム開発を進めるためにも、是非、長期研修生を大学に送ってほしい。
- ・「産業社会と人間」の導入に全面的に賛成である。10年後、20年後の生徒や保護者にとっても、導入を決断して良かったと必ず言えると思う。また、デュアルシステム的な体験学習と連動させれば更に相乗効果は上がると思う。

その2

学び直しの効果の検証を踏まえ、内容を充実させる視点で協議を行った。

ア) 泉高校

- ・次年度は学習サポートボランティアの人数が大幅に増える見込みである。

イ) 天羽高校

- ・効果測定を進めるとともに、教員、生徒いずれの満足度も高めていく必要がある。
- ・学習をサポートする学生の派遣依頼について、大学と協議を進めている。

ウ) 浦安南高校

- ・教材や指導方法の恒常的な見直しが必要であり、コミュニケーション能力を重視する観点から、国語の内容を増やしていく。

エ) 流山北高校

- ・基礎的な加減の計算を数多くこなし集中力を高めていく。
- ・学び直しだけでなく、学びはじめに取り組んでいる。

オ) 勝浦若潮高校

- ・組織的に取り組むため、外部人材を講師とした職員研修会を実施した。
- ・学び方を学ぶことも大切。

《主な意見等》

- ・習志野市では、小中学校の授業のサポート（無償）として大学生の派遣を依頼し、代わりに教育実習生を受け入れている。
- ・船橋市では学力向上支援事業として、千葉大学の教員志望の学生が小・中学校でサポートしていた（1時間で1,000円）が、予算措置が無くなると継続は難しい。
- ・最近では、大学が市町村と提携（千葉大学と船橋市・佐倉市・市原市）して学生派遣のボランティアを単位化している。
- ・小中学校レベルでは、県教委も「ちば！教職たまごプロジェクト」を実施している。文部科学省が母校での教育実習を問題視していることもあり、大学が面倒を見る教育実習を進めていく点からも、高校と大学の連携は今後広がっていくと思う。

(3) サポート体制について

《協議内容》

初めて配置したソーシャルワーカーを継続・発展させていくためには何が必要か、教員やスクールカウンセラーとどう連携していくかという視点で、協議を行った。

ア) スクールソーシャルワーカー

- ・専門職としての強さを発揮できることを明確化することが必要である。
- ・生死に関わるレベルに発展する前に生徒の状況を把握できるよう、教員との連携が

何よりも大事である。

- ・職員室で教員との情報交換を図るとともに、地域の資源や小中学校とスムーズな情報交換を前提として、連携を進めていく必要がある。
- ・厳しい事情を抱えた生徒が意欲を持てるよう、教員が連携して働きかけることが大切である。

《主な意見等》

- ・職員研修のような行事をきっかけにして、職員との意思疎通を深めることができた例もある。

《全体を通した意見等》

- ・効果測定の準備段階として、学び直しの位置づけが明確になっていない。関係校以外にも取り組んでいる学校があると思われるので、各校がどの程度、どのような形で取り組んでいるのかについて、調査をお願いしたい。
- ・効果測定のためには、入学後の基礎学力の把握が必要であり、基礎学力を確認するテストの実施状況についても調査をお願いしたい。
- ・基礎学力の定着には、全国で問題意識を持っている。高校改革の状況に関する国の報告があるので、各県が取り組んでいる内容についても調査をお願いしたい。

